

團上 祐志 のメッセージ

本展覧会ではリリース文にもございますとおり…

映画『二十四の瞳』の舞台となった岬の分教場での様子や小豆島の風俗や生活を捉えた古写真から、遺族へのインタビューから伺った当時の文化や風習、そのまなざしを再構成してアートに昇華し、未来に繋げていくシリーズを展開しています。

團上は、本展覧会『A blank of one hundred』の企画段階から、予めご遺族に制作プロセスなどを説明させていただいたうえで、インタビューにご協力をいただいただけでなく、故人の写真をベースにした制作について承諾を得ています。

アートの読み解き方に対してはさまざまな見解があり、なかには理解しづらい鑑賞者様もいらっしゃると思いますが、作品制作に対する制作者本人のメッセージから、アート作品を読み解くヒントにしてみてください。

本文を私の肖像作品への願いは、“あなたに存在してほしい”というメッセージが込められています。

私の絵画においての人物は、一つの絵画空間に一人の人物の言及という原則で描かれております。ひとり、ひとりに、フォーカスして対話を深めるという意味で、一つの画面に対して二人、それ以上の群像を描くということはありません。また、正面を向いている人物以外のものも同様です。個々の取り扱いを丁寧にしなければいけないという思いから、原則として一つの画面には一つの対象とさせていただいております。

また、私は写真をモチーフとして人物を描いております。

写真と絵画を分けるものは、写真は絶対に現実に即するという事です。

つまり写真は事実なので、その人が生者か死者かを記録しています。現実から離れることができない画像と言えるでしょう。

その一方で絵画は、その境界を身体によって時間の帯を拡張する可能性を持ちます。

そのゆらぐ境界の中に私の制作のすべてがあり、古い写真つまりは故人の画像も使用しますし、現在生きている人物の画像も使用します。

『A blank of one hundred』百の空白というのは、もちろん100年という具体的な意味もあるのですが、百 hundred 大きい、多数の 時間を取り扱うという意味合いの方が強いです。

100年という歴史的な意味が主張に強くあるのではなく、それらを含めとても大きく長い時間を取り扱い、自身の表現で包みこもうとする考えです。大きくふくよかな時間があなたへの祝福になるようにと、とても遠い、地球の反対側にいる人に手紙を書き続けているような心持ちで作品制作をおこなっています。

それでも描くということは、あなたの存在を永遠に待ち続けているということ、他なりません。

團上 祐志